

日

精神分析学の科学性批判

金蘭短期大学 三石博行

はじめに

個別科学はその作業の中で自らの科学性について反省する事は出来ない。その作業は科学哲学の課題である。仮にそれらの科学理論の認識論的基盤を点検検証の必要性は、それに携わる科学者達の問題提起として蓄積していても、その科学理論を対自化する事は科学作業の中では困難である。従って、認識論的課題は哲学の課題として今まで展開してきた。しかし、科学哲学がその研究対象の科学的知に関して認識論的な課題を抽出できたからといって、そこで科学の抱え込んだ理論的問題に答えを与える事は出来ない。それは科学の中で可能になる。つまり、科学哲学は科学に対する反省哲学としての役割を担っている。ここでは、精神分析学の科学性に対する批判や科学哲学的課題について述べる。

1、精神分析学の科学性批判の視点

1-1、精神分析の有効性や評価の現状

ラカンが当時の精神分析の在り方を批判し、フロイトの原点に戻りジスクールを精神分析療法の基本に措こうと主張し、それなりの認識論的な問題を投げかけたにも拘わらず、現実の医療の現場では、例えば特に市中病院などでは、精神科医は精神医療に有効な技術としてフロイトや精神分析学を臨床に活用しているだろうか。答えは否定的である。特に、分裂病など機能障害からくると考えられている重度な精神障害に対しては薬物療法が中心になっている。事実、おおよそ 80 パーセントの精神障害に対する治療では薬物療法が行われていると言われている。そこで精神分析を相変らず有効な科学理論として主張することができるのだろうか。

確かに、フロイト精神分析療法は神経症に対しては有効な結果が報告されている。また、仮にフロイト精神分析が日本では有効でないと言われても他に森田療法や神経内科的療法などもある。

1-2、欧米と日本の比較から

しかし、フランスやアメリカの特にカルフォルニアでは精神分析は市民の間で広く受け入れられている。多くの人々が分析家に通う。特にフランスでは分析家の資格は医学部卒業の医者のみでなく分析を受けそれなりの経験を持つ人に伝授されている。80 年代のフランスでは分析に通うことが一つの流行にまでなった。精神分析が文化とし根付く社会と、そうでない日本で、この精神分析に関する実践的理論であるかどうかの点検が同質の答えを用意していないことは明らかである。この違いは単に制度の問題であると片付けることは出来ない。

つまり、日本では分析は未だ市民権を持っていない。欧米のような精神分析家は存在しないと言ってもいい。精神障害を持つ人々は医学部の精神科か精神病院へ行き、精神病理医の診断を受けている。医者であることが精神障害を取り扱う資格の前提になっている。

それでは社会制度として精神分析は成立していない原因はどこにあるだろうか。例えば精神分析は患者と分析家との契約関係によって初めて成立している。しかし日本では、社会契約的文化は伝統的なものではない。それらはようやく最近芽生えだした。

つまり、個人と個人とが契約に従って取り結ぶ人間関係によって成立している文化が根付いていない日本で精神分析という文化は成長出来ない結論づける事が出来るのだろうか。

1-3、精神分析の科学性の点検は必要

では西欧社会では精神障害に対して実践的な医療技術として定着していると言えるだろうか。つまり西欧社会では日本のような薬物療法が中心にならなくて、本来の精神分析の医療技術が有効に発揮していると言えるだろうか。もしそうなら、精神分析は日本社会では有効にはないが、西欧社会ではその有効さを発揮していると言える。従って、精神分析はその有効さを発揮できる文化的環境に依存する医療技術であると結論できるだろう。

しかし、果たしてそうだろうか。神経症に対する精神分析医療の有効性は報告されているが、そこでも日本と同じように、その程度の差はあれ薬物療法がなされている。すると精神分析の有効性に関する疑問は、文化的環境に依存するという条件を取り払っても、成立していることになる。厳密に、どの種の精神障害が問題なのかを調べてから、精神分析は実践的医療の有効性を問題にしなければならないが、少なくとも、それが精神障害に対して絶対的に有効な医療技術であるという前提は存在しない。

すると、そこで精神分析の科学性を点検しなければならない課題が浮かび上がるであろう。

2、フロイト精神分析学に対する科学哲学的批判

2-1、K.Popper と Adilf Grünbaum の批判の比較から

最も有名なフロイト精神分析学に対する批判として常に Karl Popper の考えがいつも取り上げられる。彼は『推測と反駁』の中で、古い帰納主義の遺産を科学が持ち続けることによって厳密な科学的方法論を完成することは出来ないとして帰納主義を貫く精神分析は科学理論の妥当性に立脚していないとし、それらは反証可能でない不十分な科学であると結論づけた。この余りにも有名な Popper 批判の為に、Grünbaum が指摘しているように、精神科学を、これまで成功を収めた自然科学、特に物理学や経験科学の方法で分析しようとした「説明」の科学性を追及する人々に、非常に安易なフロイト精神分析に対する批判の口実を与えた。

Grünbaum はこの Popper の批判が正確でないことを指摘する。つまり、フロイトが彼の精神分析学を成立させるために取った「臨床観察」は他のどの科学とも同じように、ハンソンの言う「理論負荷性」を充たしているのである。つまり、それは「理論による解釈」の作業が前提になっている。その意味で精神分析学は決して Popper の考えるような古い帰納主義の遺産を科学ではないと考えた。

さらに、「狼男」と「少年ハンス」の症例からフロイトが引き出したフロイトの教訓を引合に出しながら、フロイトの「反証」に乗っ取った論理展開を具体的に示しながら、Popper が言うフロイト精神分析は反証不可能な論理概念であるという事の誤りを指摘する。

しかし、Grünbaum は精神分析を経験科学のパラダイムに抱え込もうとしていた。そこで彼はリクールがフロイト精神分析から経験主義的科学性を否定しようとすることに抗議した。リクールはフロイトの夢理論を「自己理解の解釈学」の範疇に留めようするために、精神分析学という解釈学が一方では観察可能な行動の事実とは関係ないと言っていると批判している。しかも、リクールはそのために他方では精神分析の説明は夢の表象とその因果の説明をしなければならないという自己矛盾にこもる事になると言う。だが果たして、Grünbaum の言うように精神分析を、自然科学などの経験科学の系列に入れ込めることができるだろうか。

しかし、このような Grünbaum の意向は、フロイト精神分析は 60 年代から 70 年代の流行として片付けられているアメリカの現状のかなで、Post-Psychanalyse の時代に生きる臨床精神科医として新たな精神分析の模索として見れば理解できないことはない。例えば Karl PRIBRAM, Merton GILL などのように、現代アメリカでは、フロイトのメタ科学的心理学の再解釈を試みている人々もいる。その場合、フロイトの自

日

然主義的理念が再解釈され、あたかも経験主義的でしかも自然主義的な実証科学的方向が芽生えてこないだろうか。それはヨーロッパの解釈学的なフロイト理解には激しい敵意をむき出しにしてしまうのであろう。

2-2、Wittgenstein と Alfred Lorenzer の批判の比較から

Wittgenstein は、医療行為の中でいつの間にか分析医と患者の関係が、一方的な理論の承認、(assentiment, synkatathesis)を迫る行為にならないかを批判的に検証しようとする。そのかぎり、一回成立した理論は、検証されることはない。問題はその理論を受け入れるかどうかのみになると指摘する。そして、この精神分析の中で確立している言語ゲームに参加することが、まず問題にされる。この言語ゲームの特殊集団のコミュニケーションに参加しなければ、分析医療を受けられないことになる。

しかも、Wittgenstein によると人間は社会化の過程を通じて制度や習慣と呼ばれるコミュニケーション可能な多種多様な言語ゲームに精通しながら、生きている。それは現実則を受け入れその中で社会化という自己保存のために他者との共存を目指す自我の形成は多重的に、与えられた環境に則して形成される。このことはそれらの境界を越えることがもし簡単に出来るなら。人は色々な環境に順応しやすいという利点が、色々な環境の言語ゲームを混乱して使う可能性のあるり、そのかぎりに措いて、コミュニケーションが取れなくなる可能性が高くなる欠点になると言える。

言い換えると、ことばはその定義が成立する約束、つまり束縛を前提にしている。どのことばもそのことばが束縛されている言語ゲームの約束から勝手にはみ出して使うことはできない。もし使うなら、科学的とか生活世界とか言われる約束事は成立不可能である。

学際的に成立している精神分析学では、使われることばが本来それが定義されたいる言語ゲームの中で約束事項を無視して、他の言語ゲームの中に割り込んでくる危険性がある。この学際的研究がややともすると犯してしまう科学認識論上の曖昧さやそのための論理や概念の定義上の不明瞭さを増長させる危険性を問題にしなければならない。ある言語がそれを定義していると呼ばれる言語ゲーム上の約束で使われている限り、その約束事を無視して他の言語ゲームに使うことはできない。

例えば、「精神的エネルギー」と言うとき「エネルギー」は物理学的概念である。また、生理学的ニュアンスがありながら、それがいつの間にか心理学的計量概念に使われている。その量の単位はなにか。エネルギーである以上、カロリーで示されるべきである。しかし、それはあくまでも厳密な計量可能性を前提にしない、所謂引喩的な用法なのである。ある科学の言語ゲームないで成立した概念を勝手に他の科学の言語ゲームに持ち込むことは科学的論理や認識の在り方から逸脱しているのである。こう考えると精神分析を科学と呼ぶことは出来ないだろう。この Wittgenstein の批判はまったく正当である。

そこで Lorenzer は解釈学の科学性を呼び起こす。ここでは精神科学という科学性の在り方に限定している。解釈学は了解の技術学であると考え。そこで、解釈学に取っては知ることは、対象を説明することではない。了解することである以上、生活実践的な主体の獲得を意味する。分析理論を了解した主体はそれに措いて精神の変革が実践されなければならない。

Lorenzer は精神分析を精神現象の観察の経験を基にしてその精神現象に関する法則を見いだそうとする解釈学であり、分析家と被分析者が差異の解釈学的処理を経ながら相互に了解を確立することであると考えた。それは、生活実践の完全なゲシュタルトから集められること、常に包括的な社会理論の枠組みを要求すると考えられた。

この Lorenzer の解釈学的展開はヘーゲルらのドイツ観念論の弁証法的論理の臭いがしないでもない。それは弁証法的ということばを批判的に経験科学的に発展するというニュアンスに重ねながら、解釈を一方的な理論の承認、(assentiment, synkatathesis)を迫る行為ではない、分析家と被分析者の生活実践的な主体の

日

獲得という概念を導こうとしている。

2-3、批判的一解釈学的経験科学か経験的一自然主義的実証科学か

果たして、Grünbaum が想像するように精神分析学がその理論を他の科学、取り分け脳神経生理学や免疫学などの、実験観察可能な科学から論証することができるだろうか。この自然主義で果たして言語活動という複雑なモデルを作り、それを証明することができるだろうか。

また、Lorenzer の批判的一解釈学的経験学の展開として精神分析を美しく語り切ったとしても、現実の理論は果たして機能障害から生み出されている精神病理学的症状を治癒する事ができるだろうか。

以上のように精神分析の理論的構築は問題提起された。それらの課題を今後解決する努力は、それらの二つの主張の正しさの証明のために払われるだろう。しかし、対象認識と呼ばれた「説明」的知識の中に主体認識と呼ばれる「了解」的認知が認められないかぎり、また、その逆の了解と主体認知の広がりを通じて、現れる対象認識の展開がないかぎり、この二つの課題は哲学が主体と客体の二項図式の影を引きずりながら、不毛な議論に明け暮れるかもしれない危機を生み出すかもしれない。

3、問題提起

問題を纏めてみよう。

1、まず精神分析学の言語ゲームが拡張できる領域の再定義である。精神現象を文化形態に広げることが出来るかと言うことが問題の一点目である。そのためには、身体問題を解決しなければならない。内的精神現象形態と仮定できる自我構造と外的精神形態と仮定できる社会身体や文化の在り方、その二つの構造の相似条件の証明を通じて、それは精神現象や心が脳の現象形態であるという考え方に立っている自然主義や素朴実在論的に没入する傾向を食い止める必要がある。

2、精神現象と文化現象の相似形の証明命題は何かと言うことが問題の第二点目である。この証明は、帰納的な方法で進むものと思われる。ラカンは精神分析によってもたらされた知を新しい文化的コンテキストの中で再検討する必要があると述べた。これまで人間的現象を非実証主義的な枠の中に取り扱っている心理学などがある。それを精力的に証明する必要がある。精神分析は長い厳しい自己分析を通じて確立している。今後も臨床行為を通じながら自己分析を進めることである。

3、解釈の科学性を点検するには、解釈学の「了解」の科学性を点検する必要がある。ことである。時代的にどこまで主体問題を掘り下げかつ主体概念を広げることが可能になったかを点検する必要がある。その検証のなからから「自然科学」の説明と異なる「精神科学」の了解の科学的論拠の土台が課題になる。精神分析学はフロイトから出発して、今ようやく 100 年間の歴史を迎えようとしている。それは物理学と比べると、その歴史もそしてそれに従事する人の数も少ない。言い換えると、社会文化の現象を精神現象学の課題にしはじめてそう時間は経過していない。

4、解釈学である以上、それは解釈主体の時代的・風土的制限条件を持つ。例えば、現在の所、精神分析の解釈課題を遺伝的機能問題まで広げることば出来ない。しかし逆に、現在解釈・了解することが出来ない課題はこれからも絶対に出来ないと断定することもできない。それらは解釈学の科学性のパラダイムが変化と共に、了解の命題も拡大することになると思われる。

参考文献

久米 博 「解釈学の課題と展開 - テキスト理論を基軸として -」 in 思想 No 569, 1979. 5, pp1-20,

日

岩波書店

丸山高司 「精神科学の理念」 in 思想 No 569, 1979. 5, pp21-37, 岩波書店

廣松渉 「科学論の今日的課題と構案 -近代知の構制の対自化と超克のために-」 in 思想 No 712, 1983. 10, pp2-42, 岩波書店

小林道夫 「科学哲学」産業図書、206p、1996.8

三浦雅弘 「フロイト理論と今日の哲学」 in 季刊AZ 31号 新人物往来社、pp142-148

Alfred LORENZER *Die wahrheit der psychoanalytischen Erkenntnis Ein historish-materialisher Entwurt* Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main, 1974,

河田 晃 訳 『精神分析の認識論』、誠信書房、352p、1985.6

Adolf GRPÜNBAUM *The Foundations of Psychoanalysis A philosophical critique* Berkeley, University of California Press, 1984, 310p

村田純一、伊藤笏康、貫 成人、松本展明 訳 『精神分析の基礎 -科学哲学からの批判-』、産業図書、1996.6、336p

Adolf GRPÜNBAUM *Validation in the clinical theory of psychoanalysis A study in the philosophy of psychoanalysis*, in Psychological issues Monograph 61, Madison, International Universities Press, INC, 1993, 417pCarlo STRENGER *Between hermeneutics and science An essay on the epistemology of psychanalyse*, in Psychological issues Monograph 59, Madison, International Universities Press, INC, 1991, 234pEdited by Richard WOLHEIM and James HOPKINS *Philosophical essays on Freud*, Cambridge, Cambridge University Press, 1982, 314pLudwig WITTGENSTEIN *Lectures and Conversation on aesthetics, psychology and religious belief*, ed Cyril Barrett, Basil Blackwell, Oxford, 1966Paul-Laurent Assoun *Introduction à l'épistémologie freudienne* Paris, Payot, 1981, 223pPaul-Laurent Assoun *Freud et Wittgenstein* Paris, Presses Universitaires de France 1988, 234pPaul-Laurent Assoun *Freud et les sciences sociales Psychanalyse et théorie de la Culture* Paris, Armand Colin, 1993, 181pDonald LEVY *Freud Among the philosophers The psychoanalytic unconscious and its philosophical critics* Nez Haven, Yale Univeristy Press, 1996, 189pJacques BOUVERESSE *Philosophie, Mythologie et Pseudo-science wittgenstein lecteur de Freud* Paris Edition de L'Eclat, 1991, 141pPaul ROBINSON *Frued and his critics* Berkeley Universty of California Press, 1993, 281pKarl POPPER *Conjectures and Refutations* New York, Basic Books, 1962

藤本隆志他訳 『推測と反駁』法政大学出版社、1980

Karl PRIBRAM, Merton GILL *Le Projet de psychologie scientifique de Freud Introduction à la théorie cognitive et à la neuropsychologie contemporaine*, traduit de l'américan par A. Rauzy, Paris, Presses Universitaires de France, 1986, 224pHiroyuki MITSUISHI *Déconstruction et reconstruction de la métapsychologie freudienne* Ille, Universté d'Ille 1993, 537p